
彼女の笑顔

さすらいのかえる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼女の笑顔

【Nコード】

N9713B

【作者名】

さすらいのかえる

【あらすじ】

彼女が僕へ何冊かのノートを差し出した。「私の全てが入ってる。持ってた」僕へ何を託そうとしているのだろうか・・・

彼女が僕へ何冊かのノートを差し出した。

「私の全てが入ってる。持ってた」

彼女はこういう気持ちで、僕に何を託そうとしているんだろうか？
何と言ったらいいかわからなくて、ただ黙って受け取った。

彼女が嬉しそうに笑う。それを見て、泣かないと決めていたはず
だったのに……彼女の前で久しぶりに泣いてしまった。

彼女は優しく笑うと、僕を軽く抱きしめる。

「半年前に戻った感じだね」

そう、半年前まではこれが普通だった。僕はよく泣く男だったの
だ。

どんな場所だろうが、人前だろうが泣いてしまうのが僕で、その
逆が彼女だった。

でも、病気が発覚してから、それが逆になる。彼女は僕の前だけで
泣くようになる。

彼女からノートを受け取ってから一年が過ぎたころ、やっと決心
して、僕はノートを開いた。

読めずにいた託されたノートは日記だった。僕が知らない彼女が
そこに居た。

高校生のころから、書かれていたのが、大学生になると、僕の名
前が少しずつ出てくるようになった。か、かなり恥ずかしい。

読み進めるとだんだん辛くなってくる。一年半前の出来事が鮮明
によみがえってきた。

彼女は、最近物忘れが激しいと自分の異変に気付き始めていて、

その影響で、仕事でもミスが続いて落ち込んでいた。

彼女の言葉に、僕は疲れているんじゃないか？ とか、冗談気味に返事を返していた。

彼女もその時は笑っていた。

数日後に会うと様子が変だった。

念のために病院へ検査に言っただけをようやく僕に話すと、僕に抱きついて、ただただ泣いた。

この時初めて、僕は、彼女の涙と弱さを知った。

少しだけ落ち着いた彼女が話します。簡単に言つと若年の痴呆症らしい。

彼女の場合進行が早いという事だった。

「全部忘れちゃうんだって」

「……」

「ごめんね」

「何で謝るだよ」

「……」

ただ抱きしめる事しか僕には出来なかった。

この日から、彼女は、何もなかったように、僕の前以外では気丈に振る舞って、僕の前では泣くようになる。

弱さを見せてくれるようになって、僕は嬉しかった。けど、日記には自分を責めている彼女が居る。

僕の前で、甘えてばかりだと……。あの日の前日の日記にも。

ノートを渡された一ヶ月後には病気が急速に進んでしまって、誰だか判断がつかなくなっていた。でも、僕がお見舞いに行くと笑顔で出迎えてくれ、そして、そっと彼女から手を握られる。

帰る時になつても手を離さないのによく困った。

次の一ヶ月後には彼女はもう居なかった。病院をどうやってか抜け出して、事故で亡くなったのだった。

日記をどうにか読み終える。泣きながら読んだので頭が痛い。泣

き過ぎだよな。

泣いている自分に苦笑していると、一つ気付いた。

この日記を受け取った時も僕は泣いていた。彼女が自分を責める気持ち少しは減ったんなら、我慢できずに泣いたのも良かったんじゃないかな。

僕の泣く事で、彼女が救われたのなら……。

あの時の彼女の笑顔を思いながら日記を閉じた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9713b/>

彼女の笑顔

2010年10月12日00時33分発行